

大都市自治を問う ～橋下市政の検証～

京都大学大学院 藤井聡

序章 大都市自治の「光」と「影」

・大都市では、大衆化が進行 + 地方自治では首長の権限が(国政より)より強力

→ **大都市自治では、改革・全体主義が横行** (改革派首長)

※ **改革・全体主義** = 「兎に角、改革すればよい」というノリが全てを支配する状況

「ノリ」の実相 = ウソとデマの**プロパガンダ** + 批判者に対する**嫌がらせ圧力(テロル)**

「思考停止」が全ての基本

・その最先端が「大阪」 = 橋下維新改革

だから、大阪は今、「死に至る・専制都市」(ティラノポリス)

第1章 「改革」全体主義の構造

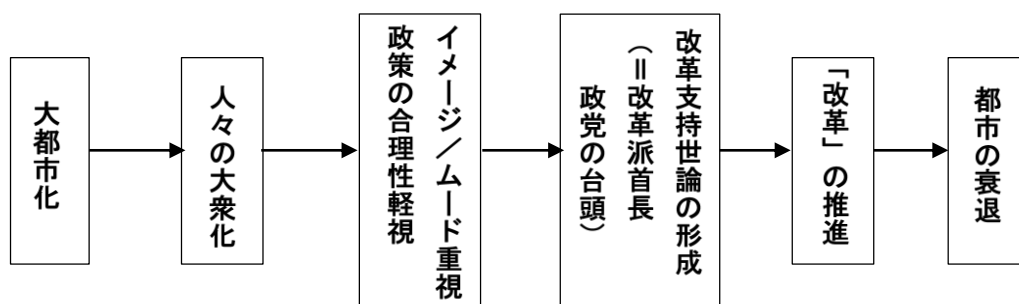


図1 大衆化と改革推進を通じた大都市自治の劣化プロセス

- ・改革派首長 = 石原氏、猪瀬氏、田中康夫氏、橋下氏…等
- ・(実証データ) 大衆化した有権者は、新聞より TV を重視し、かつ、その候補者が「おもしろい」かどうかを基準として入れている。
- ・ハンナアーレント「全体主義運動は大衆運動であり、それは今日までに現代の大衆が見出し**自分たちにふさわしいと考えた唯一の組織形態**である。」

第2章 「大阪市住民投票というテロル」を検証する

・都構想・橋下支持者の多くは、理性でなく、「ノリ」で支持している。

例) 「彼(橋下氏)が発する「甘言」はすべて嘘だと思っている。それでも・・・彼の攻めの姿勢には賭けてみたい。」 (IRONNA 編集長 白岩賢太氏)

- ・「住民投票」の政治決定それ自体が**暴挙**である (議会決議が党利党略に踏みにじられる)
- ・橋下大阪市長の振る舞いは、論理構造上「**業務上過失致死傷罪**」と同義である

(※ 市長は、法的に義務付けられている「都構想の理性的に説明」をしなかった)

第6章 大都市自治における「言論弾圧」

- ・批判メディアに対する、市長からの直接的圧力
- ・批判者に対する「公党からの抗議文」の送付、「ツイッター」等による罵詈雑言
- ・TV局、大学への、批判を辞めさせるための圧力(公党からの書状、国会質問等による)

第11章 溶解する都市計画

- ・無くなった「大阪市のマスタープラン」(大阪市解体の先取り)
- ・空間的・時間的な連続性が欠落している「グランドデザイン大阪」が策定される
- ・まちづくりの基本単位「自治会」との連携の劣化
- ・広域行政連携の劣化(奈良県知事、兵庫県知事、等と対立)
- ・財界の主要プレーヤー関西電力との対立、トラック・タクシー協会との対立、医師会、歯科医師会、薬剤師会と対立。。。等

第14章 「大都市自治の改革・全体主義」に対抗する三つの処方箋～自由、マネジメント、そしてプロジェクト

- ・すぐに忘れる大衆、ウソで自滅する大衆 (何度も詐欺にひっかかる者は破産する)
- ・三つの処方箋
 - 1) 「自由な言論活動の展開」
 - 2) 「改革から改善(マネジメント)への転換」
 - 3) 「制度論からプロジェクト論への転換」

(付録) アメリカを支配しかけた、改革派首長 ～橋下維新とそっくりの話～

『大恐慌期の米国でルイジアナ州の政治を牛耳り、ほとんど私物化した人物がいた。ヒューイ・ロングという米民主党の政治家である。

彼は子だくさんの農民の子として生まれ、高校中退後にセールスマンとなったが、一念発起して短期間で弁護士資格を取得して活躍。鉄道管理委員に当選したのを振り出しに、刺激的な演説で支持者を増やし、ルイジアナ州知事に就任すると、またたく間に同州を支配して、「キング・フィッシュ(王魚)」と呼ばれた。

さらに、ロングは知事の後継者に腹心を指名して、自らは上院議員に替えて中央政界に乗り出す。米民主党内でも急速に勢力を拡大して、F・ルーズベルト大統領の地位を脅かすまでにいたった。

ロングの手口は、政敵たちを既得権者とくっつけて口汚く攻撃することだった。ニューオーリンズ市を中心とする富裕勢力に対しては、州法を改変し重税を課して貧しい州民の溜飲(りゅういん)を下げさせ、彼らが喜ぶ政策を乱発して支持層を広げた。さらに反対派をたたくため新聞を規制し、民兵まで組織して独裁を確立している。

中央政界に進出してからも、ロングはルイジアナ支配を維持しつつ、ルーズベルトのニューディール政策を批判し、ラジオを通じてSOW(富の分配)運動を全国的に展開した。この運動は富裕層の税率を急増させて米国民の貧富の差を解消するというものだったが、その有効性をロング自身が信じていなかった。彼が目指したのは、単に敵を設定して大衆の熱狂を背景に敵を倒し、さらなる権力を手にすることにつきた。

・・・(中略)・・・さて、キング・フィッシュはどうなったのか。彼はついに米連邦政府とも対立するようになり、ルーズベルトは連邦軍を入れてルイジアナを制圧することすら考えた。ところがある日、ロングは不慮の

死を遂げて彼のルイジアナ王国は崩壊してしまう。その後、ロングの無法な独裁が暴かれ「アメリカン・ファシズム」と呼ばれたが、支持者たちは彼に投票したことを頑(かたく)なに正当化し続けたといわれる。』